

曾呂利新五衛門

尾張四郎著

冒名新左衛門



尾崎士郎

會品利新左衛門

昭和二十六年四月二十日印刷
昭和二十六年五月一日發行

定價一八〇円

著者 尾崎士郎

発行者 中西清

印刷者 中川二郎

発行所 株式会社ジープ社

東京都中央区銀座西二の二
電話 京橋(6)四九四一・五〇五二・七三四〇番
振替口座 東京一九五一〇九番

落丁乱丁は発行所でお取替え致します。

研文社印刷・城南印刷・宮原製本

會呂利新左衛門 目次

第一章	1
第二章	37
第三章	73
第四章	107
第五章	145
第六章	169

扉 装
・
挿
画 幀

清 中

川
水 ・
一

崑 政

第一章

ながながと続いた梅雨の、びしよびしよ雨で、まったく臍の中までカビが生えそうなるつとうしさである。

それが十三日ぶりで、今朝、夜があけてみるとからりと晴れあがつた。だまされたような上天気で、たちまち、ギラギラ光る真夏の油照りとなつた。

そこらじゅうの泥濘からは湯気が立つて、みるみるうちに乾いてゆく。ジンジン蟬の聲が、にわかに湧き立つて、焼きつくばかりの暑さに変つた。

天正十年五月のある日。場所は泉洲堺の南ノ荘、目ノ口町、がらんとした浄土寺境内の隅つこにある、蘆葺きのひしやげたようなふる家だが、しかし恰好のいい松が枝をのばして、ふかふかと軒先きを覆っているので、遠見だけはちよつとした風雅さを見せている。

その取つつきが板敷きの仕事場になつている、ひと聞かない奥の部屋に散らかつてゐる膳や木枕なぞまでが、そこからひと眼で覗かれるほどの佗住居なのである。

鼻のひしやげた、眼のほそい、おそろしくむつとりとした小男が、その仕事場のまん中にすしんと胡坐をかいて、ぼんやり表の往来を眺めている。小男の膝のぐりには鉋屑や細工道具などが散らばっているが、朝から仕事をしているというわけではなく、前の日のそのまた前の日の、ごみの中へ、いつものとおりおさまりかえつたというだけのはなしで蚤がいたのであろう、ときどき頸すじなぞをぼりぼり搔いたりしながら、唯、何となく、外の夏景色にうつとりと見とれているというだけのことである。

蓮の葉っぱを陽よけの笠代りにかぶつた、丈のひよろ高い男がもろ肌ぬぎ、――捲きつけた古布子の腰に太刀の落し差しという恰好で、せかせかと山門をのぼつてきた。

すかすかと軒先きまでやつてきて、かぶつた蓮の葉をぽんと路上になげすてた。

浪人面というか、それとも野武士面というか、頗る不敵な面構えで、注文どおりの無精ひげを生やしている。

「どうした、新左？」

「どうしもせぬ」

小男は金轆眼をくりくりうごかした。

「飯はないか？」

「ある、——勝手にふがつて勝手に喰え！」

大男はニタリと笑つて裏木戸の方へ廻つた。

ざぶざぶと水の音が聞え、台所で何やら、かたこと言わせていたが、たぶん、沢庵の尻尾か何かで飯をかつこんでいるらしい。やがて、満足そうに伸びをしながら仕事場へはいつてきた。

「どうだ、与五」

小男は肩を張つて威張つた、恰好をしてみせた。

「どうも、何だ、火事と戦さに縁のないやつは仕様がねえなア」

と、大口あけて、からからと笑つた。笑つてみると案外に愛嬌のある丸顔だつた。それとくらべると小男の方は、これはおそろしく見劣りのする無恰好な顔である。鼻が低いだけでなく、眼はどんぐり金壺ときている。おまけに、ひよつとこ口で、下唇がそっくりかえつてゐる。

小男の名は曾呂利新左衛門。商売は細工師で、何によらず不思議に器用な男なのだが、殊

に刀の鞘をつくらせると天下一品。そろりそろりと吸い込むようにびつたりと合うので、人呼んで、そろり新左衛門という。相手の与五作は、新左衛門といつしよに、この近所で生れて、この近所で育つた餓鬼仲間である。図体が大きくて力がつよいので、いつの間にか侍志願をするようになった。こいつが浪人もののような恰好をすると、びつたりと板についてしまふ。――それが自分でも得意らしく、もしどこかの近所でひと合戦おつばじまつたら、先ず物具と大身の槍を手に入れ（そんなものは金さえ出せばどこにだつてさらざらころがつている）、それから先きは一国一城の主になろうと本気で考えている男だ。

しかし、与五作の空想も、あながち痴人の夢とのみ片すけるわけにゆかぬのが当時の天下の形勢である。

その年の三月、武田勝頼が天目山で自害して甲斐源氏総本家が滅亡している。すると上杉景勝は越中へ攻め込んで柴田勝家と魚津城の取りつこをやつてゐるし、草履とりからのしあがつた新興大名の随一人羽柴秀吉は、毛利征伐で高松城を水攻めにしている真つ最中なのだ。上杉謙信と武田信玄が互いに邪魔をしあつて、ついにやり損つた天下統一の大業が、今や、織田信長の手へするすると落ちてゆく見透しがつきそうになつてゐる。

日本国じゆう、絶めるところなくつづいてゐる戦争を数えあげたら際限もあるまい。このどさくさの中にあつて、一種の文化事業をやつていた大名というと、九州の大友宗麟、有馬晴信、大村純忠などのキリシタン大名くらいのもので、彼等はローマ法王に使節を送り、向うからくる宣教師を迎えて、新しい文物をとりいれ、いつぱしのモダン風を吹かせていた。

ところで、当時の堺と言へば、人も知る日本一の貿易港、日本一の文化都市、日本一の繁華街で、――街に住む金持ち連中は戦争のはなしとなると、苦蟲を噛みつぶしたような顔をしてそつぽを向いてしまう。金ですむものなら金で片すけしてしまうという腹でもありまたそれだけの実力も持つていた。

「時に新左、耳よりなはなしがあるぞよ」

与五作が膝を、乗りだした。

「なんだな？」

新左衛門は、気のない声で訊き返した。小男であろうと、醜男であろうと、鞘づくりにかけては天下第一の名人である。その上茶道は武野紹鷗に学び、香道は志野宗心門下の

逸是と聞えている、——与五作の耳よりな話などに耳を貸す興味はないのである。

「新左、今夜、ジャガタラ屋今九郎のところへ南蛮人の客がくるんだ。京から下つてきた南蛮寺の伴天連（パテレン）だそうだ」

「うん、そうか」

ジャガタラ屋ときいたら新左衛門は急に乘気になつた。「それでどうした」

「いや、ジャガタラ屋では、けさ夜あけからその支度で大さわぎだ。大した御馳走だぞ」

「それがどうしたんだい？」

「それでな、——実は、おれに忍んで来いということだから、お前もいつしよにいつてくれよ」

「何だ、忍んで来いだと、だ、だれがそんなことをいうのか？」

「おたねさんだよ」

「おたねさん？」

新左衛門は呆然としてしまつた。「おい、お前はどうかしているぞ、おたねさんがどうしてお前に、——お前はおたねさんを以前から知つてゐるのか？」

「知つてゐるさ」

与五作はケロリと答えた。ジャガタラ屋今九郎のひとり娘、おたねといえは、齡は十九で当世育ち、堺の街に住む男で、おたねの姿を憧れぬものはあるまい。

「だからさ、唯、知つてゐるのか、それとも話でもしたことがあるのか？」

新左衛門の口が真剣にとがつてきた。おたねも志野宗心の香道の弟子だから、新左衛門は香合せの席で何度も連座している。堺十人衆の一人、その大分限者のジャガタラ屋の秘蔵娘が、足輕志願の与五作風情に忍んで来いとはいささか腑に落ちかねる。

「へ、へ、へ、へ」

と、与五は、くすぐつたそうに肩をすばめた。与五の語るところによると、その年の春、住吉祭のときに生酔いを七八人なぐりとばして、おたねをたすけたことがあるというのだ。その後二三度、往来で出逢い、今朝は今朝でおたねの乳母に逢つた。そのときはなしなのである。

新左衛門は、呆れたような、ほつとしたような、にやにや笑いをうかべながら、
「よそう、見せつけられるお前のお供はできかねる」

「いやにあつさりしてやがるな、酒も料理も、お嬢さまのお声がかりで、ふんだんにさしあげると乳母がいつていたぞ」

「だから、ひとりでゆけよ」

「こいつ、友だち甲斐のない、——ひとりでは具合がわるいから、いつしよにいつてくれと、お前に頼んでゐるんじやねえか？」

「だからよ、おれがいくら身体が小さいからつてお前の尻馬に乗つかつてゆけるかい、どうせ裏木戸からこつそり入つてゆくんだろう、忍んでゆくなぞとおどしやあがるから、おれはまた、おたねさんの寝部屋へでもゆくのかと思つていたが、どうせ、そんなことだろ
う、やい与五！」

「何でえ、いやに大きな声を出しやがつて？」

「おれがゆくなら、大威張りで、堂々と客になつてはいつてゆくよ」

「こいつ、何だつて」

「何なら、お前をつれていつてやつてもいいぞ」

「本気か、手前？」

「誰れが嘘をいうか？」

「そ、そんなら、つれていつてくれよ、同じ喰うなら、おれだつて客の方がいいや」

「じゃあ、仕方がねえ、つれていつてやろう、その代りなんだぞ、お前はおれの下郎ということになるんだぞ」

2.

月もなければ星もない、真つ暗な晩だつた。

ジャガタ屋の大きな屋敷の、ながながと塀をめぐるした裏手は、しいんとしすまりかえつていた。

高い塀の下に立ちどまつた二つの影、おそろしく大きいのと、おそろしく小さいのが、街からくる仄あかりの中にちらつとうかびあがつた。

「おい、この塀をのぼれ！」

新左衛門が背伸びをしながら与五の耳にささやいた。



「おい、木戸ならもつと向うだよ、乳母がちやんと明けとくといつたんだから」

「いいからのぼるんだ、のぼつて庭へおりたら、木の枝をたたき折つたり、石燈籠を蹴倒したり、あばれるだけあばれてから、また此処へ引返えしてくるんだ」

「おかしいじやねえか、お客になるものがあばれるなんて？」

「そこが軍略だ、そのくらいができなくつて、貴様戦場なぞへ出てゆけるかい」

「だから、やろうと思えばわけはねえが」

「じやあ、やれ、おれはここで待つていてやるからな、さア、ゆけ！」

与五作は、ちよつとためらつたが、やつとあきらめたと見えて、ひらりと堀へとびついたり、軽く身をひるがえして内側へとびおりてしまつた。

「ぎやつ！」

妙な喚き声が聞えた。おどろいたのは与五作の方である。広々とした庭中の石燈籠に灯を入れてもどつてきた庭番の爺を、とびおりたとたんに与五作が踏みつぶしてしまつたのである。

「これ、爺さま、しつかりしろ、怪我はないか、いや、こいつはどうも」

そとで聴いていた新左衛門は、思わずじれつたそうに舌なめずりをした。

庭廻りの爺は与五作の介抱で、どうやら正気に復したらしい。

「どなた様ですか、御親切に」

と、言いかけてから、どきつとして、とびあがつた。

「あつ、手前は泥棒だ、——助けてくれえ！」

絶叫する声につづいて、どたん、ばたん大きな物音がひびいてきた。塀の外にいた新左衛門は、とたん、蝙蝠のように袖をばたつかせながら駆けだした。

「御注進、一大事、——曲物でござるぞ、いそぎ提燈の御用意」

ジャガタラ屋の表口から店の中へとびこんできた男をひと眼見て、店の若いものたちは細工師の「そろり新左衛門」であることを勘づいたらしい。——べらべらした肩衣には大きく蕪が染めだしてある。狂言の太郎冠者てつくりの服装なのだ。

「唯今、某、下郎を台しつれてお宅の塀外を通りかかりましたところ、一大事、——庭内では何ものかゝ曲者と組打ちの様子、各々、提燈、提燈」

ふだんの時とはちがつて客があるので店子は燭台がならんでいた。